

お魚 金子みすゞ
海の魚はかわいそう。
お米は人につくられる、
牛は牧場で飼われてる、
鯉もお池で麩を貰う。
けれども海のお魚は
なんにもお世話にならないし
いたずら一つしないのに
こうして私に食べられる。
ほんとに魚はかわいそう。

年長ゆり組さんの食育の会の日、この詩を読んでどんなことを思うかを聞いてみました。

- ・魚は自然に囲まれてるけど、悪いこともしてないのに食べられてかわいそう。
- ・魚だけは何も貰っていないから本当にかわいそうだな。
- ・魚はお世話をしてもらっていないから、自分でお世話してあげたい。
- ・魚が釣られちゃうのはかわいそう。さばかれちゃったら痛いかな。
- ・魚釣り行ったとき、ちっちゃいのは「また来てね」って海に返してあげる。
- ・魚釣りに行って魚が釣れたら、飼ってあげたくなっちゃう。
- ・魚は食べるときもあるけど、のこしちゃったらもったいない。せつかく命をもらったのに…

いろいろな感想が出てきて、感心しました。

この詩を読むと、食べられてしまう魚がかわいそうだから、魚は食べないということもあるかもしれません。

人は他のものの命をいただかなければ、生きていくことができません。

命を守るためには、他のいのちを食べなければなりません。

自然の中で生かされていることを気づかせてくれます。

たくさんの命によって生きているのではなく、生かされているということを覚えなければなりません。

食事の前に、「いただきます」という挨拶をするのはそういうことなのです。

だから、わたしたちは、命を無駄にしないでいただかなくてはならないと思います。

